小心者が逝く

サンドマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小心者が逝く

【Ｎコード】
Ｎ７２６２Ｘ

【作者名】
サンドマン

【あらすじ】
高校受験を控えた主人公上条颯真は目を覚ますと目の前には荒野が広がっていた。
そこには三人の変な女の子と、下敷きになってる男がいて・・・。

注意
作者は小説の書き方を知らないド素人です。

さらにオリジナル展開やオリキャラ、アンチ等があります。
こんな駄文でも構わないよと言う方だけ読むことをお勧めします。

小心者が来た（前書き）

主人公上条颯真は小心者です。

基本的に長いものに巻かれろ主義です。

これは主人公が、死なないように頑張るお話です。

小心者が来た

初めまして俺の名前は上条颯真と言います。受験生の俺は明日受験する高校に遅刻しないように早めの就寝を取った。そして目が覚めた俺はなんやかんやあって今皿洗いをしている。

上条「なんでこんな事を・・・」

すまん、なんやかんやじゃ分からないな、きちんと話そう

家で寝ていた俺が目を覚ますとそこには辺り一面荒野が広がっていた

上条「・・・・・・」

え、なにこれ？なんで俺こんな所に居るの、て言うか時間！

？？「あ、あのー」

今日受験する高校は名門校なんだ遅刻なんか死んでもしたくない。

??「あのちょっと・・・」
あれ、時計がない。て言うか家がない!!。

上条「ここどこだ!?」

??「あの、すいません!!」

上条「うぉじゃ!?」

だだ誰だいきなり、びっくりして変な声出ちゃったじゃないか。

「・・・・・」

上条（・・・何だこの娘たち）

目の前には変わった格好をした三人の女の子が俺を凝視していた。

上条（劇団の人か?武器みたいなの持ってるし）

??「えーっと・・・大丈夫ですかぁ?」

そうこう考えてると桃色の髪をした娘が心配そうに話し掛けてきた。

上条「あ、えっと、だっ大丈夫だと思いますハイ・・・」

俺は戸惑いながら応えた。

桃色「ホッ。良かったぁ～♪」

上条（そうだ、この娘に聞けば分かるだろ）

上条「あの、つかぬことお聞きしますが・・・」

桃色「はい？」

上条「ここはどこなんでしょうか？」

桃色「へ？」

上条「朝のこの時間帯に車どころか人っこ一人見当たらないんですけど・・・」

桃色「・・・・・・」

上条「もしかして日本じゃない、とか・・・・」

桃色「にほん？」

上条「？？」

桃色「？？」

おかしい・・・意味が通じてないような・・・

桃色「それよりも下の人は大丈夫ですか？」

・・・下の人？

？？「お、重い・・・」

うわっ！なんで俺知らない人の上に乗ってるんだ！？

上条「すすすいません今どきます！」

下敷き男「ったく、ひどい目にあった」

上条「すいません・・・」

俺の下敷きになっていた人は忌々しそうに嘆いた。

下敷き男「で、ここはどこなんだ」

黒髪「ここは幽州啄郡。五台山の麓だ」

は？、幽州って三国志で出てくる地名じゃないか・・・三国志？

上条「幽州・・・です、か？」

桃色「そうだよ。それよりそっちのお兄さんの服、すごいね」

赤髪「キラキラ輝いてるのだ！」

下敷き男「ん？、そりゃあポリエステルで出来てるからな」

え？、ポリエステルの服？。
あれ、なんか頭に引っかかるな。

下敷き男「ところで君たちの名前聞いてもいいかな

劉備「私の名前劉備玄徳だよ♪」

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

関羽「我が名は関羽雲長と言う」

劉備！関羽！張飛！？
これってまさか！！

北郷「俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園に通っている」

「北郷一刀おおお！？」

北郷「うお！何だいきなり」

上条「す、すいません知り合いと名前が似ていて驚きまして・・・」

間違いない、これ恋姫無双だ。
・・・でも関羽と張飛は分かるけど劉備はなんで居るんだ？
確か出てなかったはずだけど？

北郷「・・・まあいい。
それでお前は？」

上条「あっ、俺は上条颯真と言います。受験生です」

もしかしてこれ真恋姫無双なのか？
確か新キャラが大量に出るって宣伝してたし。

北郷「そうか。それより劉備、関羽、張飛ってせれ本名なのか？」

劉備「ホ～ントホント。私たち嘘つかないもん♪」

北郷「・・・まさかタイムスリップか？」

劉備「ねぇねぇ、今度は私たちから質問してもいいかな？」

北郷「え、あぁ構わないよ」

劉備「それじゃあお兄さん達はどこから来たの？」

北郷「さあ？気がついたらここにいたかな」

上条「・・・俺も一緒です」

関羽「ではあなた達どこの出身でしょうか？」

北郷「日本の東京」

上条「・・・日本の福島県です」

鈴々「お兄ちゃん達いったい何者なのだー」

北郷「何者って日本人としか言えないな」

上条「そう、ですね」

劉備「ねぇ愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、この人達もしかして天の御遣い様じゃないかな！」

上条（・・・やっぱりここでも天の御遣いがあるのか・・・）

北郷「何だ？その天の御遣いって？」

劉備「天の御遣いって言うのはこの乱世を平和へと導く方のことです御遣い様」

関羽「桃香様、あのエセ占い師の予言を信じてるのですか？」

劉備「もちろん♪だって流星が落ちた所にこの人達がいたんだから♪」

張飛「でも占いじゃひとりの天の御遣いが～って言ってるのだ。お兄ちゃん達は二人いるよ」

・・・は、何それ、どういうこと、｛ひとりの｝天の御遣いって。

上条「それってどういう・・・」

グゥ～

北郷「悪い、起きてから何も食べてないからつい」

劉備「そう言えば私たちも食べてないね」

鈴々「鈴々お腹ペコペコなのだ！」

関羽「でわ、近くの街で食事を取ることにしましょう」

上条「・・・・・」

仕方ない、天の御遣いについては後で聞くことにするか。

俺達は近くの街の酒家へと向かった。

小心者が来た（後書き）

長くなりそうなので、二つに分けることにしました。

こんなことで大丈夫か？

小心者が来た２（前書き）

失敗した・・・前半と比べて後半が長くなってしまった・・・

今後このようなことはないよう気おつけます。

小心者が来た2

あれから数里ほど歩いき、街へとついた俺達は食事を取りながら、劉備達と話をしたんだ。

劉備「それでね、北郷様。さっきも説明した通り、私達は弱い人たちが苦しんでいるのを助けたくて、今まで旅を続けていたんですが・・・」

関羽「宦官たちは私腹を肥やし、賊が横行している昨今」

張飛「鈴々達だけじゃ限界なのだ・・・」

劉備「だからお願いします!!
私達に力を貸してください!!」

やっぱりこういう展開になるんだ・・・

北郷「俺が、天の御遣い・・・」

劉備「御遣い様!!お願いします!!」

北郷「・・・わかった。

どこまで出来るか分からないけど、俺で良ければ協力しよう！！」

すげぇ、流石主人公。

即断即決かよ・・・

劉備「本当ですか！？やったよ愛紗ちゃん御遣い様が協力してくれるって！！」

愛紗「ハイ！。北郷様、これからよろしくお願いいたします」

北郷「ああ！。天の御遣いの俺にまかせてくれ！」

劉備さん、嬉しそうだな・・・

北郷さんもノリノリだし・・・

張飛「そっちのお兄ちゃんはどうするの？」

上条「え！？」

俺は・・・

上条「俺も、協力します・・・」

劉備「上条様もですか！？ありがとうございます。これで百人力です！」

関羽「上条様もよろしくお願いします」

上条「よろしくお願いします・・・」

その後食事の支払いをしようとしたが、お金が足りず、俺達は今店の手伝いをしている。

女将さん「こら！！サボるんじゃないよ！！」

上条「ハイ！、すいません！！」

いったいいつ終わるんだよぉ。

劉備「はぁ～～～・・・疲れたよぉ～～～～」

関羽「全くです。戦場で槍を持つならば疲れなどしないのですが・・・」

女将さん「はっはっはっ。厨房だって女の戦場なんだ。それにこんなんでへこたれてたら、これから先人助けなんて出来ないよ？」

北郷「え？」

女将さん「厨房であんたらの話が聞こえちゃってね、・・・応援してるよ、お嬢ちゃんたち」

張飛「うぅー。それなら皿洗いは勘弁して欲しかったのだー・・・」

女将さん「それはそれさ。人間堂々と生きて歩くためにゃ、ケジメってやつが必要なんだ」

そう言いながら、女将さんは

女将さん「ほら、こいつを持っていきな」

と、瓶のようなものを取り出した。

女将さん「こいつはうちで扱ってる酒さ。大望を抱くあんたらの門出の祝いにやるよ」

関羽「女将」

女将さん「あたしも今ご時世には嫌気がさしてるんだ。・・・期待してるよ！」

張飛「任せろなのだー！」

女将さん「頼もしいねぇ・・・それで？あんたら、この先行くあてはあるのかい？」

関羽「それは・・・」

劉備「まだ決まってません・・・」

女将さん「それならこの近辺を治めてる公孫賛様のところに行ってみな。義勇兵を募集してるから」

劉備「そう言えば白蓮ちゃんがこの辺りに赴任するって言ってた！」

関羽「・・・桃香様。そういうことはもっと早くに仰ってください」

劉備「うぅ、ごめんなさ～い・・・」

張飛「お姉ちゃんは天然過ぎるのだ。・・・それでどうするのだお兄ちゃん達」

北郷「ん？」

上条「え？」

張飛「お兄ちゃん達は鈴々達の主人になったんだから、行き先を決めるのはお兄ちゃん達の仕事なのだ」

北郷「主人？、俺が？」

上条「主人て・・・」

関羽「そう・・・ですね。
鈴々の言う通り、あなた方は我らのご主人様だ」

劉備「じゃあご主人様。白蓮ちゃんのところに行っても良いかな？」

北郷「ああ、じゃあ行こうか！」

上条「俺もいいと思います・・・」

そして俺達は公孫賛の本拠地へと出発した。

ーーその途中ーー

劉備「これが桃園かー、すごいね♪」

関羽「美しい・・・まさに桃園の名にふさわしい美しさですね」

張飛「きれいなのだ～」

北郷「すごい・・・桜みたいだな」

上条「・・・・・」

すげぇ、これが有名な桃園の誓いの桃園か・・・
なんか、クルものがあるな。

張飛「さぁ酒なのだー！」

ワクワクした様子の張飛が俺達の周りをクルクル走り回る。

関羽「・・・約一名、ものの雅を分からぬ者がいるようですが」

劉備「鈴々ちゃんらしいね♪」

北郷「だな。・・・ま、いいや。みんな準備は良い？」

劉備「うん♪」

関羽「はっ！」

張飛「良いのだ！」

上条「ハイ・・・」

北郷「じゃあ、初めようか」

その言葉を聞いた関羽は、盃を空に向かって高々と掲げた。

関羽「我ら五人っ！」

劉備「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

張飛「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

関羽「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

上条「ね願わくば同年、同月、同日に死せんことを」

北郷「乾杯！」

こうして俺は戦乱の世へと足を踏み入れたんだ・・・

小心者が来た２（後書き）

主人公の世界では真恋姫無双はまだ発売されてません。

なので主人公の知識は恋姫無双までです。

こんな主人公で大丈夫か？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7262x/

小心者が逝く

2011年10月20日03時05分発行